

福祉系 対人援助職養成の 現場から^⑬

西川 友理

社会福祉士養成校の ある授業にて

「医師は体を、心理士は心を、法律家は司法関係をサポートしてくれるよね。じゃあ社会福祉士は何をサポートするのか、というと、私達の生活なんです。」

ふーん、という顔をして、学生はこちらを見ている。

畳み掛けるように質問します。

「ところで…生活って、何？」

(生活って…何って聞かれても…何?)
眉間にしわを寄せます。抽象的過ぎてわからない、といった顔です。

そこで、こんな問題を出します。

「あなたは1週間後から6ヶ月の間、入院することになりました。退院後は、健

康に生活できます。さて、入院までの1週間、入院中の6ヶ月間、退院後の1ヶ月間、この3つの期間で、やりたいこと、やらなきゃいけないことをリストアップして、スケジュールを立ててください。」

20歳前後の学生の場合。

「ええっ、6ヶ月間！ヒマやなあー！」

「6ヶ月間も入院したら、体が鈍って、クラブの選手からはずされるやん！」

「バイト辞めなあかんあ…携帯代払えなくなるかも」

「僕、今入院したら、うちの家計がかなり大変になるんやけど…」

「休学手続きってどうするのか？っていうか、成績評価どうなんねんやろ？留年せなあかんのかな？」

「復帰の時って、勉強についていくの大

変ちやうやろか。」

「じゃあ俺、いっそ、この機会に学校やめる！」と勢いよく言った学生は、他の学生から

「お前なあ、『学校中退』の肩書きは一生涯付いて回るねんぞ、もっとよう考える。」などと突っ込まれています。

これが通信制の受講生の場合だと、生活する上で抱えるものも多く、シビアに考える傾向があります。

「まずは保険会社に電話せなあかん！」

「6ヶ月間も休んでしまうんやったら、今の職場復帰出来るかなあ、辞めなあかんかなあ。」

「6ヶ月間も、何しよう？仕事一筋やったから、思いつかん…」

「今担当してる大量の案件、一週間でどうやって引き継ごう？！ちょっと大変やわこれ！」

「子どもが小さいからかわいそうやわ…うちの旦那、毎日のご飯とか洗濯とか、ちゃんとやってくれるやろか。」

「1人暮らしなんですけど、電気・ガス・水道って、こういう時止めることが出来るんですかね？家賃半年分、もったいないけど、1週間じゃ引越しも無理やし…あ、まずは1週間で冷蔵庫を空っぽにしないと…」

中にはこんな人もいます。

「私…来月結婚式やる予定なんですよね。」

「えーっ！そ…それは大変ですね！」

「友達にも色々頼んで、結構大々的な披露宴をやっちゃう予定やったんですけど…キャンセルやなあ…うわー、そうならめっちゃへこむわあ！」

感受→想像→判断→行動

社会福祉の仕事は、だれかの生活を側面から支援する仕事と言えます。例えば、日常生活において多種多様な問題を抱えている人から相談を受け、社会的資源の情報提供や活用の助言をするなどです。

その人に合ったより良い支援を行うためには、その人の状況や気持ちに思いを馳せられるようになることが必要であると考え、「そのためには、どんな演習授業をするといいのかな」と、頭を捻ります。

私達が何らかの行動を起こす時、そのはじまりには“何かを感じる”という状況があります。五感で感じること、雰囲気を感じることで、それらは人が持つ「感じ取る能力」、「解釈する能力」であり、これが感受性なのだと思います。

ここ数年で停波されたアナログTV放送に例えるなら、感受性のうち、「感じ取る能力」がアンテナ、「解釈する能力」は受信調整(チューニングとチャンネル設定)でしょう。

世の中には煩雑な情報が飛び交っていますが、私達は感受性のアンテナに引っかかったものしか拾えません。それをチューニングし、チャンネル設定されたものだけを映し出す心のTV画面を見て、「あ、これはこういう意味だろうな」「こんな時にはこうすればいいんじゃない

ないかな」と、想像力をふくらませ、これらふくらんだ想像に基づいて、「これは〇〇だ」「こんな時には、そうだ〇〇しよう」と経験から判断し、行動を起こします。

社会福祉士の養成校に入学する以前から、学生たちにはそれぞれの感受性が育っています。各人が育ってきた社会環境（家庭、社会、文化風土等）から与えられたあらゆる刺激が情操教育となって、感受性の形成に寄与してきているのです。

例えば優しさや思いやり、他者のつらさを感じ取れるアンテナで、引っかかったものの中から、

「困っている人や困った状況があるな。」と解釈し、

「この状況に私が何か出来るためには、どうすればいいのか。」と想像します。

そんな学生が、雑誌や新聞の紙面、あるいは高校の進路指導の最中、

「困っている人や、大変な状況に働きかけることが出来る仕事がある。それは社会福祉専門職だ。」

という情報を得ます。そして、

「そんな仕事に就きたいな。」

「そんな仕事をすれば、私もこの状況に対して働きかける事が出来るんじゃないかな。」

と想像します。それから、

「よし、じゃあこの社会福祉士っていう資格を取るために、養成校に進学しよう！」

と判断し、担任や親に相談したり、願書を取り寄せたり、受験をするという行動にうつります。

養成校に入学した学生の中にはこのような学生が多くいます。中には「親から言われたから」「とりあえず合格したのがここだけだったから」という学生もいますが…。

養成校における、

感受→想像→判断→行動

入学してきた学生には、社会福祉専門職としての感受性のアンテナを増設する必要があります。アンテナが増設されると、アンテナに引っかかる波長が増えます。アンテナの増設とは、法制度の仕組みや、心理学や医学、社会の動向、面接技法といった「社会福祉専門職としての知識」を得ることです。

また、社会福祉専門職としての知識が増えると、チューニングの精度も変わります。チャンネルの設定数も増えます。より社会福祉専門職らしい解釈ができるようになります。

解釈の方法が変わると、社会福祉専門職らしい想像をするようになります。

「あの制度が使えるんじゃないかな。」

「こういう心理的状况に陥っているんじゃないかな。」

これらの想像と、蓄積してきた経験、そして「社会福祉専門職としての知識」をもって、判断します。

「この人には、こんなサービスを紹介してみよう」

「こういう声掛けをして、相手の出方を見よう」

そしてこの判断に基づいた行動は、客観的に見ると、いかにも社会福祉専門職らしい働きになっていくのです。

学生達は、徐々に社会福祉専門職らしく感受、想像、判断、行動ができるようになり、またそのように養成教育を行います。

卒業後の彼らは、日々更新される社会の法制度や文化、乗り越えてきた様々なケースを経験に、自らより高性能なアンテナやチューナーを作りつづけ、進化し続けていくのです。

つまりそれが「専門職としての支援をしている」状態であると考えます。

感受し、想像し、判断し、行動する。

各々が社会福祉専門職としてこの一連のステップを踏めるようになるためには、社会福祉の知識が必須です。アンテナの材料であり、チューニングとチャンネル設定の基準であり、判断基準であり、行動指針であるそれらの「社会福祉専門職としての知識」が必須です。だからこそ、「社会福祉専門職としての知識」を沢山提示し、与えることを、養成校では行っています。

アンテナ増設中！

冒頭に挙げたワークの続き。

一通り彼らが考え、何人かに発表してもらったところで、感想を聞きます。

「色々やらかなあかんことがあるなあと思いました。」

「実際何かコトが起こったら、思いのほか色んなことに影響が出るんですね。」

「何よりお金！それから仕事が、大変ですね。」

「私もお金と仕事が大変になるやろと思っていたけど、それより家族や親族を必ず巻き込んでしまうというのがつらかったわ。」

そして最後に、種明かし。

「今出てきた困りごとは、お医者さんに相談することでも、心理士さんに相談することでも、法律家に相談することでもないですよ。そりゃあ聞いてもらえない事はないだろうけど、ちょっとズレてますよね。」

「…。(うんうん、と頷く学生たち)」
「頑張ろうと思えば、まあなんとか頑張って自分で調べたり、対処できるかもしれない。でももし、頑張れそうにないほど心身が疲れていたり、認知状態が低下していたり、状況が複雑すぎて、頭が混乱していたら？」

「…？」

「そんな時、自分にとって便利な情報をまとめてわかりやすくしてくれたり、複雑な手続きを簡単に教えてくれたり、そういうサポートがあったら、なんとか対処出来るかもしれませぬよね。」

「…！」

「ここで、おさらい。お医者さんは体をサポートします。心理士は心をサポートします。法律家は司法関係のサポートをします。社会福祉士は生活をサポートします。」

学生たちが、“はっ”とするのが見て取れます。

「今皆さんが挙げたような、こういった

悩み事は、生活上の問題です。社会福祉士の支援対象、“生活”って、つまり、そういうこと。」

各々の感受性のアンテナに、ぐぐっと新たな知識が付け足され、それまでの経験に、次々と専門職としてのチューニングがされ、チャンネルが設定され、映像が映った瞬間。

「…生活の支援ってどういうことか、解りましたかね？」

学生たちがうなずきます。皆の表情は言っています。

(…面白い！)

福祉から社会福祉に、 クラスチェンジ。

私がここで言う“福祉”とは、私的なものであり、個々人の「困っている人を何とかしたい」といった思いやりや優しさに基づいた行動です。

また、“社会福祉”とは、法制度によって成り立ち、公共性と継続性がある、人を支援するシステムです。

“福祉”の根拠は、その人の気持ちです。賛同者が得られなければ、そのままその人の単なる自己犠牲や自己満足になってしまいます。賛同者がいたとしても、その賛同者がいなくなれば、なくなってしまう行動です。

“社会福祉”は、その社会に必要なシステムですから、税金が投入され、人が雇われ、生業とする事が出来ます。また、その社会で必要性が認められ、存続が可能であるかぎり、その“社会福祉”は存

在し続けます。

各々の思いやりや優しさは、大切なものです。それらが“福祉”ではなく“社会福祉”という法制度の中で行動に移されることで、公共性と継続性が保証された行動になります。また、生業として成り立つ、支援という行動になるのです。

養成校は、“社会福祉”を生業として行う人、つまり社会福祉専門職を養成しているのです。

これらを意識し、しっかり練った授業をすると、授業中に突然、成長の瞬間を見ることが出来たりします。

講義をしているこっちにしても、流れ星を見つけた時のように、ドキっとする瞬間。

こういうことがあるから、授業ってホントに、クセになるのです。